

財団法人 黛民族舞踊文化財団



舞 踊 文 化
E. T. C

NO.15

目 次

日本の伝統芸能の型	学習院大学名誉教授	諏訪 春雄	2
自然人アイヌ こころの歌と踊り	アイヌ文化伝承者	四宅 豊次郎	4
中国民族舞踊と稲作文化（8） 三 稲作文化の中の民俗舞踊 4. イ族「二月八」 5. 「稲が実るとラフ族の人々は狂喜する」と「拡塔節」の芦笙舞	前雲南省舞蹈家協会常務副主席	劉 金吾	7
平成 18 年度黨民族舞踊文化財団活動予定			11

日本の伝統芸能の型

学習院大学名誉教授

諏訪 春雄

日本の伝統芸能は総じて型をもっている。型は、演出、演技、舞台装置、小道具、衣装など、隅々にまで浸透している手順、段取りである。型は伝統芸能の重要な特質である。

伝統芸能が型をもっているのは、それが祭りを母胎として誕生したからである。祭りでは進行の手順はきびしくきめられていて、その変更は原則としてゆるされない。祭りの対象である神の崇りをおそれるためである。祭りから芸能へとかわり、娯楽的性格がつよめられても、ふるいしきたり、型をまもろうとする精神はそのままにうけつがれた。

伝統芸能の型は、以下のような顕著な二つの精神をもつようになっている。

1 型は《カミ》へ通じる

ここでいう《カミ》は宗教・宗派の神ではなく、個人を超えた大きな力をいう。普遍、真実、宇宙の生命といいかえてもいい。個人の創意工夫などは卑小なものであり、長い年月をかけて多数の先人が工夫をくわえてきた型こそが、《カミ》を表現し、普遍の真実、宇宙の生命へつらなることができるという精神である。

2 部分に《カミ》が宿る

古典芸能の型は、まず部分をかため、それから全体におよぶという本質を共通にもっている。最初に全体を見とおして、全体との関係のなかで部分を配置するという、ヨーロッパの近代劇の演出法にみられるような思考回路をとらないのである。日本の伝統芸能が全体を統一する演出という役職をもたないのもそのためである。そこには、部分にそれぞれの神がやどっているという多神教の信仰が生きている。部分にこそもっとも貴重なものがやどっており、部分にこだわることによって普遍に通じることができるという精神である。



図版 2

多神教の信仰から多様な芸能や演劇が誕生したのにたいし、一神教はかんたんな宗教劇をのぞけば芸能や演劇を生んではない。一神教のユダヤ教、キリスト教、イスラム教などが他の宗教の神をみとめず、十字軍の昔から現在まで、歴史の上でつねに宗教紛争をおこしてきたのにたいし、仏教の神仏習合や本地垂迹にもうかがわれるように、他の信仰に寛容であった。また一神教が神と人間との間の断絶を強調するのにたいし、多神教は神と人との交流を大切にし、人はそのままで神ともなれる存在であるとおしえてきた。古典芸能を支える精神はこの多神教的思考である。動植物までもふくめた異質なものの寛容、自分をつつむ大きな世界との調和が古典芸能の世界にはゆきわたっている。伝統芸能をささえる精神は現代においてこそふりかえられなければならない。



図版 3

図版 1 (裏ページ)

図版 2

図版 3

秋田霜月神楽の巫子舞

能の翁 現行

歌舞伎の翁 江戸時代

＝自然人 アイヌ＝

こころの歌と踊り

アイヌ文化伝承者

四宅 豊次郎

第13回 大自然に対する感謝祭

まりも祭りにアイヌが加わったことについて、祭りの根幹をなす事柄であるから、その仕掛人であった山本多助エカシ(長老)に、直じき意見を聞いたことがある。

「何も古来からなかったといって、祭事を創ってはならないということはない。世界のいかなる国においても、またどのような民族であっても、大昔の人々は何か重要な事柄を神々に祈願することがあり祭式をつくった。それを子孫が永々と受けついできたにちがいない。まりも祭りの場合、自分は最もよきアイヌの理解者であり友人である丹葉節郎氏(元釧路公民館長)や、その他の心ある人々、地元の有志と相談しておこしたことから責任をもつ。最初は周囲のみんなは返還されてきたマリモを阿寒湖に送り還すという単純な発想だったが、俺はどうせやるならアイヌ民族のもっている自然崇拝の思想をこめて、一年に一度くらいマリモを通して大自然に感謝するのだと考えて、これまで儀式的中心でやってきたのだ」

エカシは最初静かに語ってくれたが次第に熱が入る。

「だから、カムイノミ(神への祈り)の詞(のりと)でも、一度だってマリモを神様だといったことはない。(もちろんマリモは神様ではない)天や太陽神、山や森・湖・・・その他おおくの神々とに護られてマリモを育むすばらしい大自然があるからこそ、われわれ人間も動物・魚類たちも生きていくことができるのだ。まりも祭りをを行うのは天然に対する感謝祭だよ」山本エカシはなお語る。

「北海道でいつの頃から自然保護運動が始まったか知らないが、俺はまりも祭りはその先駆けでないかと思っている。四十年もつづいたら、これはもう立派な祭りだよ。ワッハッハァー」と最後には大声で笑い飛ばした。

これは平成二年(1990年)の《まりも祭り四十周年記念誌》をつくるときに、私が山本エカシと対談したときの記録である。

これまでの歴史の中でまりも祭りも、マリモ返還の行事は昭和三十年後半でその使命を終え、それ以後は地元住民が秋の観光シーズンを少しでも伸ばすための行事にしたいとのもくろみであったが、これも年々晩秋に入っても観光客の大幅増によって達せられてきた。

現在でも、まりも祭りはアイヌ祭式を表面に出した阿寒観光のイベントであると思っている人々があまりに多いのに驚くことがある。

私達アイヌ民族は先にも述べたように、単なる客寄せの行事で祭事をおこなっているのではない。



山本多助エカシ

第一代目の司祭主であった舌辛音作エカシをはじめ、二代目の志富宗作エカシ、次の日川善次郎エカシ、そして現在の秋辺今吉エカシと長老達は代わってきたが、まりも祭りを通して真のアイヌ精神を伝えてきたコタン(村)の人々の単純明快な合言葉を、ここでもう一度かみしめてみたい。

『マリモは阿寒共有の財産である。アイヌも和人も大自然の恵みに感謝し愛護精神をもって、これからもまりも祭りを続けてゆくことだ』まりも祭り発足当時は苦勞の連続であった。阿寒湖畔の有志や観光協会役員はもちろん先頭に立って運動を開始したが、釧路支庁、国鉄釧路局、その他多くの熱意ある人々の尽力があったことを忘れてはならない。

アイヌ文化の良き相談相手であり協力者であった丹波節郎氏は、「はじめマリモ保護に関わった頃は、そんな事は好きな奴が道楽でやればいいんだ、と言われて小馬鹿にされた時代であった」としみじみ語っていた。

そしてアイヌの行事や集会などでは、機会あるごとに参加者を前にして、拳を振り上げて次のように熱弁をふるった。

「まりも祭りでも、イオマンテ(熊の霊送り)でも、何の助言も協力もしないで、無責任な態度をとって“ウソとデタラメな祭りだ”とアイヌ民族を批判する学者や知識人に対して、私は決して許さないし断固として抗議してきた。この気持はこれからも変わらない！！」いつも誠心誠意で人々に接し、正義感に燃えている丹波先生の言葉に、ウタリ(同族・仲間)一同はみな首肯いて共感していたことを思い出す。

また、アイヌのよき理解者であり、ウタリとも常日頃、交際のあった種市佐改さん(元・釧路観光連盟事務長)の話はすばらしい。



丹波節郎氏



チュウルイ島にて(昭和43年頃) (前列左)

秋辺福太郎エカシ (中央) 志富宗作エカシ

「今日では村おこしとか、一村一品とかで全国総イベント時代であるが、私は『北海道のイベントで横綱は？』と聴かれたら、即座に胸を張って『西の横綱は“さっぽろ雪祭り”、東の横綱は“まりも祭り”』と答えます」種市さんの優しい語り口は無駄がなく、要点をついているので聞く人の心を打つ。さらに、「どうか伝統を誇るまりも祭りに町民をあげて協力し、マリモ愛護の心を柱として、永遠につづくよう念願している」と結ぶ。

まだ娯楽施設の乏しかった時代、厳冬期に家に閉じ籠っていた人々に、市民の発想で“外に出て雪像をつくろう”と呼びかけて始まったのが「さっぽ

ろ雪まつり」である。

雪国に活力をもたらした「さっぽろ雪まつり」と、道東の秋を彩る「まりも祭り」は、いずれも戦後間もない混乱期の昭和二十五年の誕生で、共にこれまで一回も休むことなくつづけられてきた。

参加者のバス代をただに

昭和二十五年十月に行われた第一回まりも祭りに参加したウタリ(同族)は計二十数名と記されている。

その後、地方からの参加者も徐々に増えてきたが、昭和三十年後半になると、釧路、白糠から、また弟子屈本町や屈斜路コタン(村)からも参加者が多くなってきた。

また、北見地方の美幌からもやって来るようになり、十勝からは帯広、幕別、本別のウタリも加わる。

各地から阿寒湖畔までの道程は、近い所でも五十キロ、遠方地では二百キロ以上にもなる。

日本は「もはや戦後ではない」と言われるようになり、経済的には少し上向いてきたにしても、好景気の時代が到来するまでには、まだ間がある時期であった。

アイヌには金満家はあまりいないので、まりも祭りに参加したいと思っても、交通費は馬鹿にならない額である。もちろん当時は一般家庭でマイカーをもっている人は少なかったもので、足はバスを利用するしか外に道はない。

どの地方をとっても阿寒湖までは遠距離であるから、往復のバス代を考えると、毎年行きたいと思っても二の足を踏むようになる。

阿寒湖アイヌ協会の役員は、どうしたら地方の参加希望者を一人でも多く迎えることができるかと知恵をしばった。

その結果、近年の観光ブームによってバス会社も繁盛しているので、阿寒湖へ路線をもっている各バス会社に、協力要請することを考えた。主旨は次のようなものである。

まりも祭りの開催にあたっては、阿寒町をはじめ観光協会、阿寒湖のホテルや旅館、観光汽船、地元住民が一致協力して盛り立てている。また釧路管内の各関係機関にも後援をいただいているので、バス会社におかれましてもご協力をお願い申し上げます。

つきましては、まりも祭りに各地方より参加するウタリの往復のバス代を無料にさせていただきたい…云々、今考えてみると可成り虫のいい話であった。



種市佐改氏

中国民族舞踊と稲作文化（8）

前雲南省舞蹈家協会常務副主席

劉 金 吾

三 稲作文化の中の民俗舞踊（続き）

4. イ族「二月八」

毎年農曆の2月8日はイ族の伝統的な祭日である。イ族の分布は比較的広範囲にわたり、支族もかなり多い。のみならず広く分散し、小さく集中するという状況で居住地区を形成する。各支族、各居住地区は様々な歴史的要因と周囲の文化環境の影響で風俗習慣にいくばくかの差異を生じている。「二月八」、この伝統的な祭日の内容と形式もまた各支族、各居住地区ごとに異なった文化特性を備えている。楚雄のある地区では2月8日は稲モミや家畜の魂を呼び戻す日となっている。何故なら二月八日からは春耕の準備が始まり、もしその時に稲モミや家畜の魂が呼び戻されていないと豊作になるのは難しいと思われるからである。巍山のイ族は2月8日に山に向かい山神を祭って人々や家畜の隆盛を祈り、災難から逃れることを願う。曲靖、武定、東川等の地区では2月8日は土主の縁日となる。土主とは即ち村里や一部の地域の守護神であり、この日に人々は歌い踊って祭りを盛りたてる。楚雄のある地区では「二月八」は「祭牛節」と呼ばれ、2月8日当日には牛の頭に馬櫻花（ネムノキ）を挿して、塩水で牛の口をすすぎ、牛の群れを遊牧のため山の斜面に追い上げるときに牛の群れと共に飛び跳ねて歌を歌い、思う存分楽しむ。これは牛を温めて肥らせ、消毒して病気を防ぎ、良好な状態でこれから始まろうとする春耕に参加させるためのものと思われる。姚安県光祿区では「龍華会」と称し、武定県万念区では「相会祭」と呼ばれる。大姚のイ族は2月8日を「插花祭」を過ごす、または旧正月を過ごすと言う。

その時には全村の老若男女は祭日用の晴れ着を着て、山に登り花を摘み竹かごや家畜小屋、井戸ばた等に挿して、五穀の豊穰、家畜の隆盛を祈る。またある者は花を編んで花輪をつくり、客人の首にかけて人々の幸福と吉祥を願う。三日三晩の間、人々は「梅葛」を歌い、太鼓をたた



イ族・「二月八」の祭りに赴く

いて終日踊り、歌い続ける。「二月八」の由来に関する伝説によると、イ族の先祖が敵との戦闘中に包囲され山上に追い上げられた。その時2月8日にイ族の祖先はあたりに火をつけ、歌を歌った。燃え盛る火の手に天地をゆるがすような歌声が加わり、敵はイ族の援軍が来たのかと思ってあわてて逃げ去った。この時から「二月八」が正月と定められた。またある説話によると、洪水の多発した時代に人々は皆溺死してただ兄妹二人だけが残った。兄妹が成長した後、その二人の間に一塊の大血肉が生まれた。金亀老人が剣でこの奇怪な物体を切り裂いてみると、中から50人の男の子と50人の女の子が出てきた。胎盤から吹き出た血は一滴ずつ木にふりかかり、それは見る見るうちに真っ赤なネムノキに変わっていった。その花が咲いた日が「二月八」……であった。

以上のようなそれぞれに異なった祭日の内容と歴史伝説のなかに違う時代の生産方式、生産力の発展の度合い、さらに違う時代の人々の思考方式、自然に対する認識能力、心理の特徴までもが見て取れる。その内容はというと——人々は厳寒の冬を過ごし、二月に暖かい春を迎える。人々はうららかな春の光の中で思いきり楽しみ、春の日の恵みを心ゆくまで享受した。それから厳しい春耕の準備に入り、春耕の生産にいそしんだ——。

とりわけ大姚の「挿花祭」では稻魂を呼び戻したり、土主や山神を呼び返したりせずに、切花を飾って豊作を願い、吉祥や幸福を祈っていることがわかる。人々は心ゆくまで歌い、思い切り踊ってリフレッシュした後、両手で力いっぱい働き、五穀の豊穰と人々や家畜が安楽に暮らせる生活をつくりだしていく。

5. 「稲が実るとラフ族の人々は狂喜する」と「拡塔節」の芦笙舞

「稲が実るとラフ族の人々は狂喜し、山々に芦笙は響きわたる。口で吹く芦笙は心の願いを語り、吹けば吹くほど穀物は倉に満ちてゆく。」「踊りといえば芦笙舞、人が増えれば喜びも増し、黄色の灰は三丈も上がり、風邪でもせきでも治ってしまう。」（注1）芦笙舞はラフ族の人々の生活に不可欠な一部分である。喜、怒、哀、楽がすべてその中で語り尽くされている。稲作生産と生活の必然もまた芦笙舞の表現する主要な内容である。芦笙舞では稲作生産の全過程が詳しく模擬描写されるが、それ以外にも人々の稲作に対する思想や感情も表現される。「風が吹き稲穂がなびく」や「稲を助けるために舞う」などは作物の生長がよく、人々が豊作の期待に胸をふくらませている心情を表現している。「斑鳩（キジバト）が稲モミを拾う」は豊作になり、その後で脱穀して家に持ち帰ることを説明している。規模が最大で最もにぎやかに豊作を祝い、祈る芦笙舞はやはり秋の収穫の



ラフ族の芦笙舞とパイ舞

後、春の種まきの前に行われる「拡塔節」の時に踊られる芦笙舞であろう。「拡塔」とはラフ語の音訳で（旧）正月を意味し、毎年農暦の1月1日から15日にかけて行われる。生産に力を集中させるために、種まきの後には一般に芦笙舞は踊られることはない。

旧正月の二日目から芦笙舞が踊り始められる。村落のある家が自ら進んで進行役をひきうけ、村人すべてとその他の村落の親戚や友人を招待する。踊りの時には客に食事を出して接待し、プロの芦笙吹きを呼んで決まった額の報酬を払う。そのため、芦笙舞の進行役となる家はその年の豊収が約束され、加えて比較的裕福な家がひきうけ手となる。

踊りの次第は以下のようなものである。

進行役は先ずよい食台を用意し、その上に今年蒔くために準備した種モミを並べる。種モミを入れたカゴの中には満開のモモやスモモの花がついた枝を数本さし、香を添え、さらにもち米でつくった餅、肉、酒、茶、塩、トウガラシ等を並べる。芦笙吹きは家の中を踊りながら三回まわり、その家の祟りを排除したことを示した後に食台を打歌場（芦笙舞専用につくられた村落の中の広場）に持って行く。その途中で芦笙吹き達は大路舞を踊り、打歌場に着いたら中央に食台を並べ、台のそばに葉のついたサトウキビを植える。地方によっては青々としたマツの木を植えることもある。食台の上に並べられた種モミは芦笙舞が終わった後に田に蒔かれ、豊作が期待される。種モミを入れたカゴにさした満開のモモやスモモの枝は、種モミが田に蒔かれた後、桃李が開花したように稲に大粒でたくさんのモミがつくようにという表象であり、マツの木は人々の生命がその木のようにずっと青々として続いていくという象徴である。葉のついたサトウキビは、その一節ごとに甘さが増すように人々の生活もまた一年ごとに良くなっていくことを示している。食台の上のその他の食物は祖先への供養の品であり、同時に衣食が満ち足りていることを象徴している。

芦笙舞の進行役となる家は3年連続でその役をつとめる。最後の年の収穫時にはおごそかな手順での儀式を行う。進行役の家で踊りの終了が告げられると芦笙吹きは村人を率いて掃地舞と呼ばれる踊りを踊りながら食台を3回まわる。その行為は一切のよいモミや肥料、食物が幸運に恵まれてそっくりそのまますべて家に戻ってくることを象徴したものである。さらには人々が着た芦笙舞の衣服にまで福が宿っているとして、村人達は芦笙舞を踊った後にほこり等をはらってから、その衣服についた福や吉祥が我が家にも来るようにと家に持ち帰った衣服を再びはたいてほこりを落とす。食台を踊りの進行役の家に戻す時に、ある村落では次のような儀式を行う。

進行役の家ではわざと門を閉め、能弁の人を頼んで門の前にいてもらい、芦笙吹きと縁起のいい話をさせる。芦笙吹き達は門の外で“牛や羊は群れをつくり、ブタは小屋にいっぱいいます。米は倉に満ちていて、金銀財宝は門にころがりこんでいます。”そう言うとうまく外の人々が入れるように門が開けられ、人々



ラフ族の服装

は皆「ありがたいお言葉をいただきました。」と返礼をする。食台が家の中に運び込まれ、さらにその台のまわりを3回踊りながらまわる。その意味は、これですべての良いモミ、肥料、作物、そして福や幸運がそっくり家に戻ってきた、というものである。この時に進行役の家では年老いた芦笙吹きの手をすすいでやる。芦笙吹きは「お幸せに！長寿と健康をお祈りします」と祝いの言葉をのべる。食事の時には村落の中の人望も知識もあり、儀式に詳しい長老に祝辞をのべてもらう。その祝辞は「万事がうまく運び、衣食が満ち足りて、無病息災、五穀豊穰、家畜もよく繁殖しますように。生産は毎年増加し、今年の食台の上に乗った4～5 碗の料理が来年には6～7 碗に増え、生活も年々向上していきますように…。」（注2）

注1 李扎均『ラフ族の芦笙と芦笙舞』、（雲南『民族舞蹈』第一期に掲載）

注2 この節（第5節）の大部分は陳平『ラフ族の芦笙と芦笙舞』、（『雲南民族集刊』第三集に掲載）

翻訳： 黛民族舞踊文化財団 藤原明人

参考文献

星野紘、野村伸一『歌・踊り・祈りのアジア』勉誠出版、2000 年



中国民間剪紙



中国民間剪紙



図版 1 秋田霜月神楽の巫子舞

平成 18 年度黨民族舞踊文化財団活動予定

4 月 24 日 (月) ～ 5 月 2 日 (火)

黨民族舞踊団訪中 (中国雲南省昆明市・思茅市・シーサンパンナ州)

研究報告誌出版予定

舞踊文化 E.T.C. No. 16 発行

民族舞踊文化 No. 19 発行

舞踊文化 E. T. C. は年二回発行予定 ※皆様からの投稿をおまちします

舞踊文化 E. T. C. No. 15

発行人 犬丸 直
平成 18 年 5 月 11 日発行
港区赤坂 3-10-3

編集人 大野 晃
財団法人 黨民族舞踊文化財団
電話 03-3583-3633
FAX 03-3583-3639